

薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告

文學博士 濱 田 耕 作

一、調査の次第

大正七年一月私は宮崎縣へ出張した序に、鹿兒島縣へ立ち寄り、是より先き文學博士喜田貞吉君から注意せられた薩摩國揖宿郡指宿村の土器包含層を調査する機會を得た。此處は已に山崎五十麿君が踏査をせられて、上下二層に異種の土器を包藏してゐることが明かとなり、餘程面白い性質の遺跡であることが想像せられて居た。當時山崎君は公務差支の爲め、親しく私達を東道せられることが出来なかつたが、縣廳から縣屬竹下盛宣君が態々同行せられたので、幸に其の遺跡を調査し、多少の發掘を試みる事が出来た。併し旅程の都合で、僅に半日しか同地に費すことが出来なかつたのを残念に思つて居た。

越えて大正八年四月再び私は鹿兒島縣へ旅行するの機會を得たので、今度は山崎君の同行を煩はし、東北帝國大學教授醫學博士長谷部言人君と共に、復た此の遺跡を踏査することゝなつた。此の時は考古學教室員島田貞彦、榊原政職兩君も一行に加つて、前回よりは稍々精密な調査を行ひ、多くの資料を採集することが出来た。爾來二閏年未だ其の結果を報告する運びに至

らなかつたが、土器問題の漸く學界の注意を惹くにつれて、此の遺跡の意義が益々重要を加へて來たのと、丁度同國出水貝塚の調査報告を發表する序に之を公にすることにした。⁽²⁾

【註】(1)山崎五十麿君の「アイヌ式彌生式土器及石器等を包含する遺跡」と題する報道、考古學雜誌第八卷第七號彙報欄にあり、本遺跡發見の次第を知る便があるから次に抄記しよう。(鹿兒島縣揖宿郡指宿村大字十二町字下里に、アイヌ式彌生式、少許の齋瓮式土器及石器等を混出する包含地あり。同包含地の發見は、一昨年指宿村出身の縣下志布志中學校生徒西牟田某、同村字丈六附近にて拾ひたる土器を該中學校に持参したるものなるが、昨夏喜田博士同校の遺物を調査せられし折、右指宿村出土の遺物を見

られ、同月來麿の折、其の話をせられ、余に該遺跡の所在及兩式混出する事實の調査方を托せられしに依り、昨年九月同地に向ひ、遺跡の所在を前記丈六に捜せしも見當らず、漸く同村下里に發見し、調査したるに、混出の事實を確め得たる次第なり。云々

(2)私達の調査以前に山崎君の調査は前項の通りであるが、此の外、喜田博士も大正六年月同地を踏査せられ、東京帝國大學理學部人類學教室の松村瞭君も亦同年山崎氏蒐集の遺物を見其の實地を視察せられた。

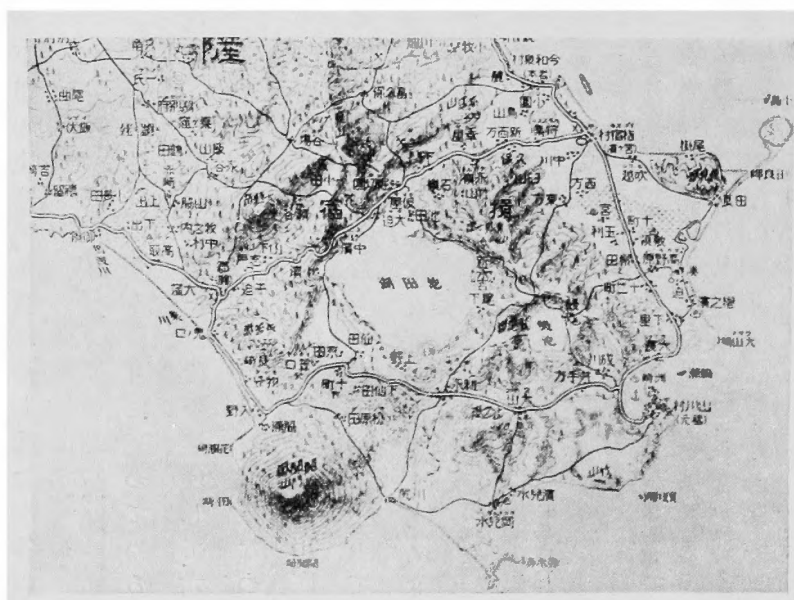
二、遺跡の地形

〔圖版第二〇—第二四〕

此の土器包含層の所在地は揖宿郡指宿村大字十二町字下里クダリに屬し、摺ヶ濱温泉場の西南數町、字丈六の地と境を接してゐる。

此の薩南半島の地は、丁度伊太利ナポリ附近フラグラエの野に酷似し、大小の火山が群集し、又た温泉が各處に涌出してゐる。半島の南端には彼の開闢嶽が美しい圓錐形の姿を現はし、今なほ噴煙を棚曳かせ、宛然ヴェスヴィオの趣を呈してゐる。又た此の指宿村の西方には、已に死滅した火山の噴火孔に、水を湛めた鰻池の湖が近く存在し、附近には硫黃熱湯などを涌出する

鰻温泉場があり、又たマール式噴火孔の名残として鰻池の北西に池底噴火孔と云ふのがあり、



薩摩半島南部地形圖

山川灣の如きも亦た噴火孔の崩壊して出来たものかと思はれる。其の外鷲尾嶽、辻之嶽など皆な火山作用で出来たものである。此等は恰もアヴェルノ湖、ヌオヴオ山、サルファターラ噴火孔などの錯綜してゐるのと同じ有様である。⁽¹⁾

此等の火山は輝石安山岩から形成せられて居り、其の麓は噴出の火山灰の層から出来てゐる。而して土器包含層は即ち此の火山灰層の低い臺地に在る。恐く其の灰層の下部は鰻池火山の噴出によつて出来たものであろうが、上層の薄い部分は開聞嶽の比較的新しい時代の噴出によつて形成せられたものと思はれる。⁽²⁾

(陸地測量部二十萬分ノ一地形圖分載)
此の火山灰層は地質が頗る柔かく粗鬆であるから、水流の作用によつて容易に浸蝕せられて、溪谷を作るのである。そこで此の鰻池

死火山の山麓の臺地には、幾本となく細い溪谷が出来て海に向つてゐるが、何れも多量の降雨のある場合の外は、水は灰層中に吸収せられて乾燥し、溪谷は同時に狭い歩道の役に立つてゐる。此の下里の土器包含層は即ち此の溪谷の一つの斷崖によつて發見せられ、此の長い斷崖は自然の發掘縦穴^{トレンチ}を形成したのである。

此の下里の溪谷は長さ數町に亘つてゐる（輝石安山岩の界から沖積層の低地に至る）。最も狭い處は幅一二間しか無いが、段々崩壊して六七間の廣さを有してゐる地點もある。高さは其の兩端の最も深い處で二十尺位段々低くなつてゐるが、私達の調査した土器包含層は此の溪谷中、幅の最も廣くなつてゐる地點で、高さ川底より約十五尺を有してゐる處である。

此の不思議な地形、珍らしい事情によつて、我々は坐ながらにして、深く斷層の間に人類の殘した遺物の層序的存在狀態を明にすることが出来たのである。

【註】(一)地質調査所發行地質圖加世田圖幅、及加世田圖幅地質說明書（井上禰之助氏）に據る。

(二)開闢嶽の噴火に關して、加世田圖幅地質說明書に擧げたもの左の通りである。

「懿德天皇御宇、薩摩國開闢山涌出（神代皇帝記）」

景行天皇十年、庚寅冬十月三日夜、國土震動風雷鼓波、

而開闢山忽涌出（開闢社緣起）

貞觀十六年、七月二日、開闢神ノ山頂ニ火アリ、灰砂ヲ

降スコト雨ノ如ク、聲百餘里ニ聞ユ（三代實錄）

此のうち前二者は信用することが出来ないから、最後のものに就きて、三代實錄記する所を擧げて見よう。

秋七月丁亥朔、二日戊子、地震、太宰府言、薩摩國從四位上開闢山頂、有火自燒、煙霧滿天、灰沙如雨、震動之聲、聞三百餘里、近社百姓震恐失精、求之著龜、神願三封戶、及汚三穢神社、一仍成三此山崇、一勅奉三封二十戶、

三代實錄卷第六

三、發掘の地點

〔圖版第二〇—第二四〕

我々の發掘調査した地點は前にも述べた通り下里の村落に向つて流れる溪流の幅の最も廣くなつた地點であるが、大正七年一月及八年四月の兩度とも此の地點を中心として、溪谷の上下に亘つて調査したのであるから、今一括して其の結果を述べることにする。

(イ) B、地點 は溪谷の幅が約七間に達し新に其の南岸に崩壊を生じた爲め、其の堆土が河底面に集積してゐる。此の新しい崩壊は、新しい斷層面を現出し、丁度樹木の生じてゐる處附近に顯著なる土器包含層或は土器の「デポット」を露出したのである。我々は先づ此の部分を調査した。

此の地點は畠地の表面から川底の面まで約十五尺ある。先づ地表から下一尺五寸程は有機質を多少含んだ灰層である。其の次に約一尺の稍々堅い黑色の火山灰の泥流(mud-lava)がある。此の泥流磐の下部には植物の葉の化石と小さい貝殻が火山灰砂の間に少し存在してゐた。以上の二層には何等人類の古い遺物を認めない。

次に厚い火山灰層が川底面まで現はれてゐる。色は黒褐色で多少處々色を異にした處もあるが、大體に於いて同一質の層として見る可きものであつて、之を細かに分つことは出来ない。此の灰層の上から約三尺の間に土器が密集してゐる。是は素焼紅褐色の土器で殊に土器の底と高坏の脚が多い。稀には完形に近いものもあるけれども、多數は破片の狀態に於いて存在する。丹を以て塗つたものも少なくない。時には幾何學的紋様を施したものもある。併し素紋のもの

のが普通であつて、所謂彌生式土器と稱するものゝ系統に屬するものである。斯の如く累々として相重なり、相接する状態から考へると、何等かの理由によつて故意に此の地點に集中せられたものと思はれる。又た此の種類の土器と交つて極く少量の鼠色の堅い陶質の土器即ち祝部土器の破片が混在してゐることは頗る注意すべき事實である。

(圖式參照)

B 地點層序並遺物包含圖式

0尺				
-1	灰	山	火	
-2	磐	流	泥	
-3	火山灰	祝部土器 (少量)	彌生式土器 (多量)	
-4				
-5				
-6		火山灰		
-7				
-8				
-9				
-10		曲線式土器 (少量)		
-11		火山灰		
-12				
-13				
-14				
-15				
	底 川			

我々は此の土器群の盡きた下方を更に深く下位の灰層に發掘をつづけ此の地點に於いて如何なる種類の土器が層序的に存在するかを究め様とした。併し此の地點に於いては生憎下

層には多くの土器を包藏して居らなかつたが、なほ地表下約十尺の深位に於いて、少許の土器破片を獲た。其の色は前述上層土器と同じであるが、其の質は少々違つて居り、間々曲線的紋様が施されてゐる。即ち是は彌生式土器とは別類に屬する純正石器時代の土器、所謂「貝塚土器」(俗にアイヌ式土器)と稱せられるものである。(圖版第三二八四)斯の如く不充分ながら此の地點に於いて、我々は上層下層相異つた土器が存在する事實を肯定することを得た。

(ロ) C、地點 併し此の層位的土器の相違は、他の地點に於ける發見を以て之を補證することが出来ゐる。即ち此のB地點から上流約七十間其の對岸に於けるC地點は、溪谷の幅が著しく狭くなり、深さは増して約十八尺となつてゐるが、地表下約六尺乃至九尺の位置に於いて、B地點下層から發見したと同様の曲線紋のある土器を採集した。而して此の層位は之を延長すると、B地點の下層土器發見の位置と略ぼ相當するのである。但し此のC地點に於いては上層に於いて土器の存在を發見し得なかつた。

(ハ) E、地點 又た次にB地點の下流約三十間にあるE地點に於いては、地表下五尺の處に、彌生式の土器の挾在するのを認め、打製石斧をも發見した。(圖版第三三〇一)併し下層土器は此の地點では認められなかつた。

(ニ) A、地點 E地點の對岸に當るA地點に於いては、上層には土器を發見しなかつたが、地表下約十尺の邊で、稍々多量の貝塚式曲線紋の土器破片を發見した。(圖版第三三三)それは疑もなく嚮に述べたB地點の下層土器發見位置に相當する層序深位である。

(ホ) G、地點 北岸のG地點には、地表下約三尺泥流磐下に貝殻の集積を見た。併し土器其他の

遺物を伴はないので、其の考古學的性質を明かにすることが出来なかつたが、其の層位から見て、上層土器と同じ時代で、當時の人類の遺棄したものと認めることが出来る。(圖版第三一)

今ま以上各地點に於ける遺物發見の結果を明瞭にする爲め、左に圖式を以て之を示さう。

C 地點	B 地點	A 地點	D 地點	E 地點	0 尺 3 6 9 12 15
	(彌生式) (祝部)凹石		oooo(貝殻)	(彌生式) 石斧	
(曲線式)					
	(曲線式)	(曲線式)			
右岸	右岸	左岸	左岸	右岸	

以上の諸地點の調査の結果は、山崎君の報告せられた通り、上層即ち地下約四五尺の處には彌生式土器が少許の祝部土器を交へて存在し、其の上に泥流層が存在する。而して下層即地表下約十尺の處あたりに、貝塚式曲線模様の土器が發見せらるゝ事實は疑ふ可からざることである。

第三圖

指宿發見上層(彌生式)土器圖(16)

(器の右上邊に附せる番號は圖版のミ一致し、下邊の番號は聚集團錄に出でたるものに係る)

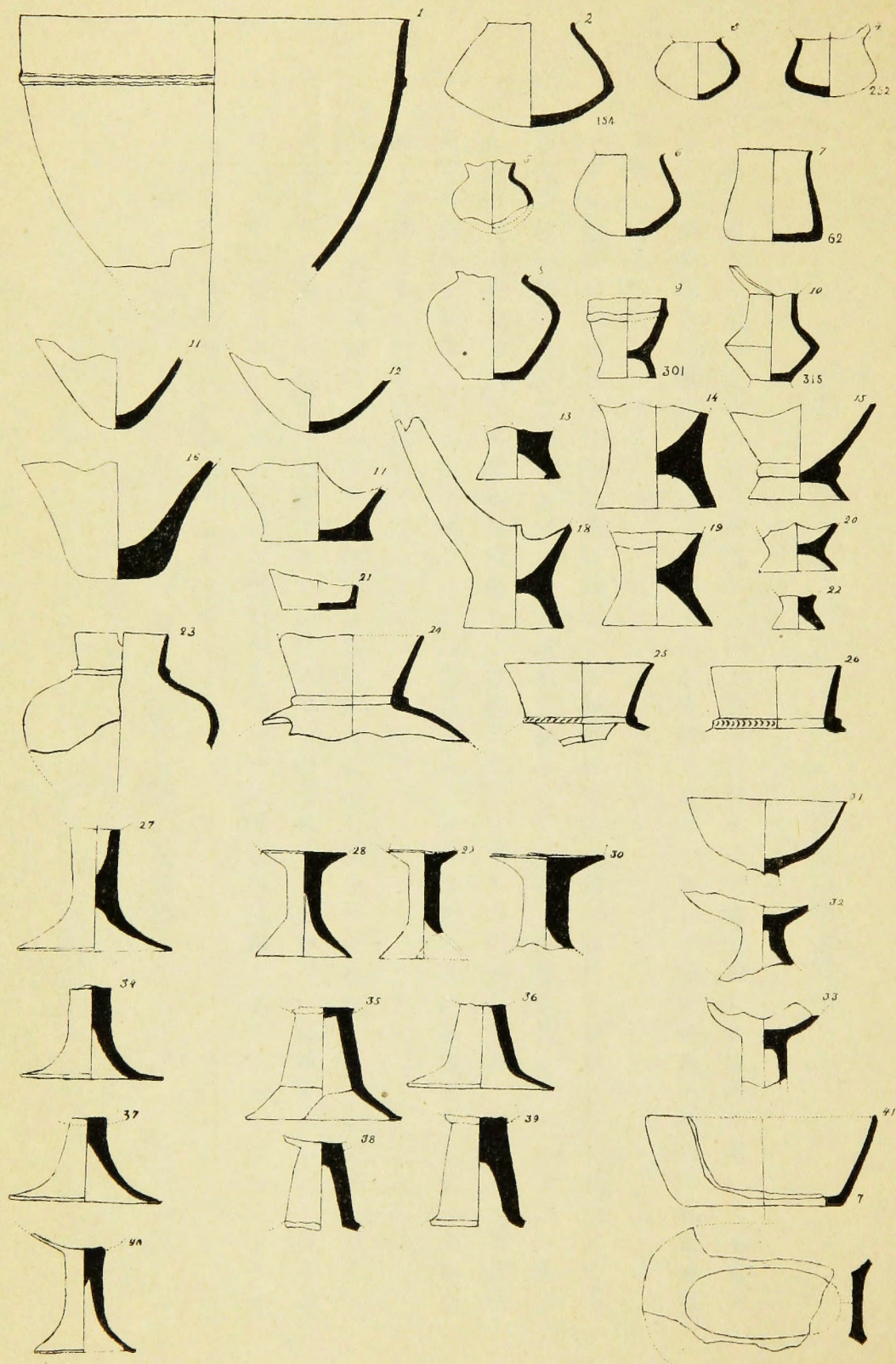


Fig. 3. The Yayoishiki Pottery found at Ibusuki.

四、上層土器

〔圖版第二五—第三〇〕

前に述べた様に此の指宿の遺跡からは、上層下層別々の土器が発見せられる。而して上層のものは素焼赭色の所謂彌生式系統のものが多數であるが併し少數の鼠色の陶質の祝部土器も発見せられるのである。

(一) B 地點から彌生式土器類と共に混在して數個の祝部土器の破片を発見した。(圖版第三三) 其の或者は蓋坏の破片であり、他のものは長頸壺の頸部らしく見ゆる。此等は其の手法に於いて形式に於いて、畿内地方はしめ日本全国各地の古墳などから出るものと全然同一であつて、其間に何等の差異を見出すことが出来ない。それが彌生式土器の多數と共に存在すると云ふ事實は頗る重要なことゝ云はねばならない。

(二) 彌生式土器系統のものは、尾張熱田、日向清武⁽¹⁾などから発見せられたものと頗るよく似てゐる。其の色の著しく紅色を呈してゐるのは、火山灰中にあつて熱を受けた爲めであらう。其の形式の上から最も多いものは高坏で、底部の尖つた壺類、其の外三四の異つた形のものも発見せられた。今ま其の形式に従つて之を説明しよう。

(イ) 高坏 完形のもののは得なかつたが、其の脚部の細く圓筒形のものゝ、太くて下部の廣がつたものゝとの二種類があり、坏部には碗形の深いものも存在して居つた。(圖版第三〇³) 其の形の細かな區別は土器圖(第三)に於いて示してあるから、一々説明する煩を避ける。ただ茲に注意す可き

ことは高坏の坏部が破損した後そこに加工をして圓形を呈せしめたものが二例あることである(圖版第三、六五⁵⁶)。是は如何なる目的に出でたものか分らないが、單に玩弄的遊戲的の意義とは見られない。又た細い圓筒形の脚を有してゐる高坏には紅殻を塗つてあるに反して、太い脚のものには塗つてないことは、其の質料に於いても、前者が精練した粘土であるに反して、後者は砂交りの粗鬆なものであることゝ共に頗る注意を要する事實である。

(ロ) 壺類 是れ亦た完形に近いものは無く、厚さの關係から底部の保存せられたものが最も多數である。是には底の尖つた不安定な形と一旦くびれて小さい平底をなしてゐる形との二種類がある。前者の一例として口徑一尺五分の大きな壺は、殆ど全形を復原するに近い破片を存して居た。(圖版第二、二五²) 是は津雲貝塚小兒人骨入壺日向高千穗發見壺などゝ其の形狀大さなどもよく似て居る。或は一種の棺甕(Cinerary urn)として用ゐられた土器形式であるかも知れない。此の外圓形の小さい壺で、或は短い頸部を有してゐるもの(圖版第二、五三⁸⁶) 底部の大きく扁平なもの(全上二²) などを見る。

(ハ) 鉢類 是には殆ど圓筒形に近く、平底を有したものの(圖版第二、二五⁷) の外に、珍らしいのは楕圓形の底部を有したものである。(圖版第二、二八⁴¹) 斯の如き楕圓の器物は、他に多く其の例を見ないものであるが、此の遺跡からは他に殆ど同様のものを一例發見し、今ま鹿兒島縣史蹟調查會の藏に歸してゐる。

(ニ) 其他 此の外珍らしいのは一種の臺附壺の類(圖版第二、三五²) で、是は丹を塗つてある。又た小さい器臺(同上)と思はれるものがある。此の器臺の類で稍々形の大きく、凸帶を繞らした完好の遺品の

一は、喜田博士の藏品に之を認めることが出来る。(圖版第 二八三)

(三) 裝飾 裝飾には二つの種類がある。一は凸狀帶で、他は幾何學的紋様の凹刻である。併し全體として裝飾の適用は此の遺跡の土器に於いて、甚だ簡略且つ稀少であると云はなければならぬ。

(イ) 凸狀帶 是は多く壺類の肩部にただ一條圍繞せられた細い簡單な帶であるが、時には之に押壓切刻の方法を以て紐繩の模倣を企てたものがある。(圖版第 二九) 又た特に注意す可きは、此の帶條が或る部位に於いて、接續せずして結繩の解かれた兩端を現はされてゐることである。

(全上及 第三〇) 是は此の遺跡の土器に頻々として見られるが、未だ他の遺跡に於いて見たことはなく、指宿の土器裝飾法の一特徴と云つて差支ない。此の凸帶が土器を絡縛した紐繩から出て來たものであることは、今更説明する迄もあるまい。又た稍々太く平たい凸帶を繞らしたものがあつた。是は後述の紋様適用の地帶として役立つてゐる。

(ロ) 凹刻紋様 此は平たい凸帶の上に刻せられ、皆な平行線を鋸齒紋的に並列した方式に出てゐる。併し其の並行線の數は一條乃至十數條に達し、各種の變態がある。又た其の並行線によつて形成せられた三角形内に他の紋様を入れたものも少くない。此の挿入紋様は皆な圓弧線若しくは其の結合から成り立つたもので、細い竹軸の端を以て劃せられた様に見える。此種の幾何學的紋様を有するものは本遺跡の外、大隅國肝屬郡大始良村横山に於いて發見せられてゐる。(4) (圖版 第五)

(ハ) 塗色 以上の外紅殻を以て器物の全體を塗つたものが少なくない。是は併し一種の高坏

及壺類のうち、特に質料の精緻な土器に限られてゐる様である。

我々は此の遺跡の彌生式系統の土器を見て、其の質料、手法、形色等の方面から、確に二つの區別を認める。即ち一は精細な粘土で造つた優美な形式を有し、精練の手法を以て成つた紅塗の土器で、他は粗末な砂交りの粘土を以て作り、稍々陶質を帯びた堅い土器で、形式は稍々剛健に出来、手法も精巧で無い。製作上から見、前者は後者よりも發達した後出の型式であるが、此の兩者は一ヶ處に於いて伴存發見せられるのであるから、其の實年代は指宿に於いては、必しも相距つたもので無く、少くとも或る時期に於いて、兩者併存したことを語るのである。

【註】(1)尾張熱田貝塚發見彌生式土器は、大正六年十二月本學考

古學教室梅原末治君の調査に據る。

(2)日向國宮崎郡加納村清武に於ける彌生式土器は、大正七年及同八年本學考古學教室梅原末治君並に余輩の調査に據る。

(3)本學考古學研究報告第五冊「備中國淺口郡大島村津雲貝

塚發掘報告參照。(圖版一一、及二四。)日向高千穗發見の壺は同上第三冊、彌生式土器形式分類圖錄第二版(二)參看。

(4)大隅國肝屬郡大始良村横山發見の土器は藤田龜三君及び瀬ノ口傳九郎君より本學に寄贈に係るもの、及び大正八年四月、本學助手島田貞彦君の調査に據る。

五、下層土器

〔圖版第三三—第三四〕

下層から發見せられた土器の大部分は、紅色を帯び、砂を交へた粗鬆な地質を有し、石器時代土器通有の特徴を具へてゐる。其の紅色を呈してゐるのは、熱した火山灰の層中に在つて變化



Fig.4. Pottery found at Aya, Hiuga.

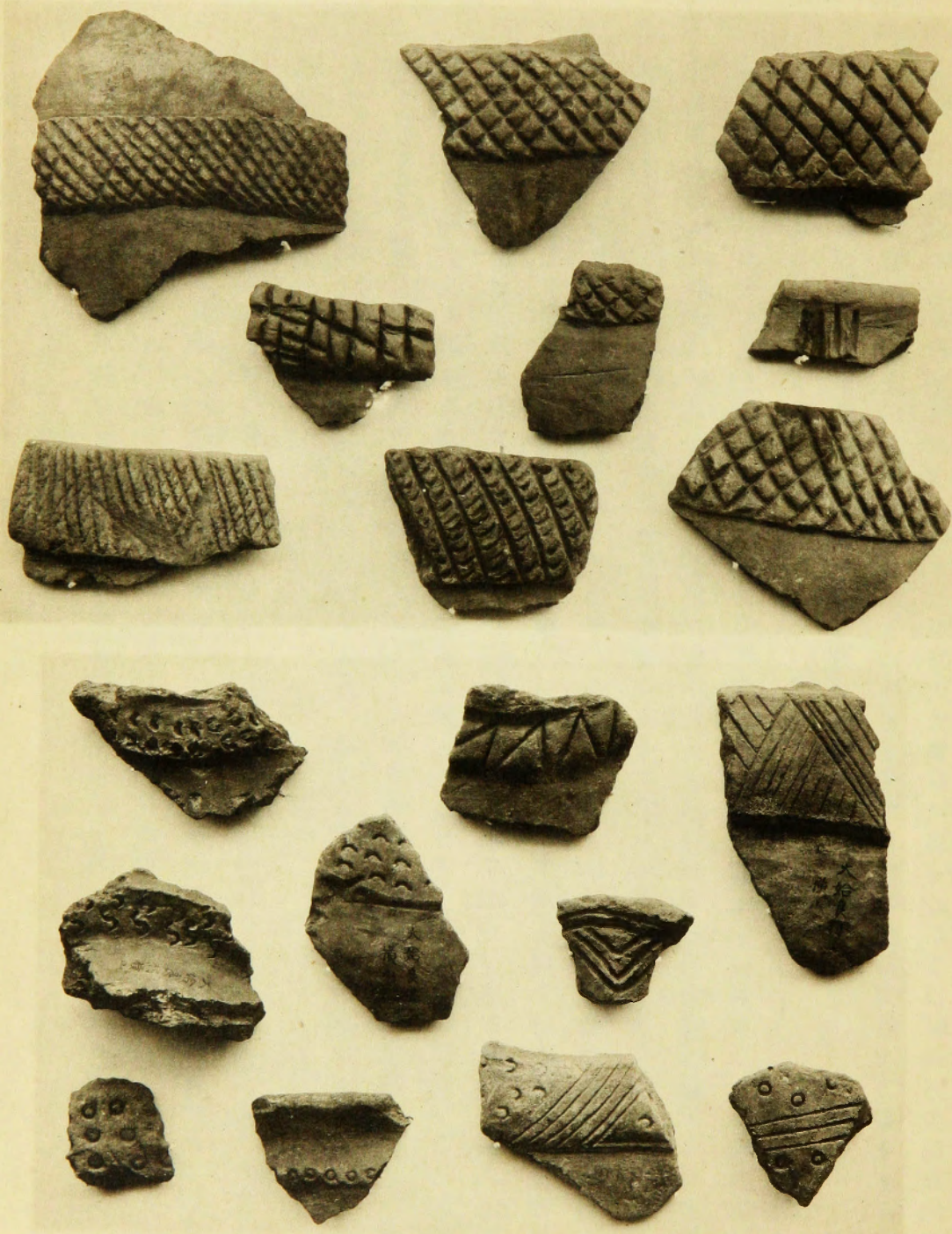


Fig. 5. Pottery found at Yokoyama, Osumi.

を受けた爲めであらうと思はれることは、伊豆大島野増村溶岩流下の石器時代土器に於いても同じ現象を認めるのを以て類推することが出来る。⁽¹⁾元來は他の遺跡に於いて發見せられる土器と同じ様に、黒褐色を呈したものであつたに違ひない。此の指宿發見のものにも、中には多少黒褐色のものが存在してゐる。

(一) 器の形式 此の下層土器の器物としての形式は、遺品が全部小さい破片であるから之を明にすることが出来ないけれども、恐らくは口部の大きく開いた單純な壺類が最大多數を占めて居つたらしい。口縁部の破片の曲線や、胴腹部の大きな破片から察すると、口徑一尺五寸に近く、高さ又た之と相若くものと存在して居つたと思はれるが、餘り小さい器物の破片と認められるものは殆ど見當らない。而して其の或者は口縁部に太い凸帶を繞らし^(圖版第三三)、或者は角張つて尖り、或者は更に大きな突角形を呈し^(圖版第二九)、又た其の突角の上に切目を施し、捉手の退化形に近いものも認められる^(圖版第三一)。此等は貝塚式土器に多く見る所の特徴である。純粹の捉手はただ一箇^(圖版第三一)、長方形の板狀の上に三つの透孔を穿ち、直線の紋様を附したものがあつた。其他口縁部は多く素縁に屬するものである。土器の底部は一二箇發見せられてゐるが、單純な平底である。^(圖版第三四)

(二) 紋様 素紋のものも時には存在するけれども、多くは曲線紋様を附してある。即ち二條の並行線を以て、紐繩を迂曲した様に、或は口縁に沿ふて、稍々直線的に適用し、或は渦線狀に、或は卷鬚的に各部分に適用してあること、亦た貝塚式土器に見る所の法式に一致してゐる。九州地方に於いて、此の土器の紋様に近いものは、日向綾村の遺跡から發見したものに認められる。^(圖版第四)

又た此の紋様は土器の表面口肩部に主ら附せられてゐるが、又た裏面にも表面と相應じて口縁部に施されてゐることが多い。此の場合には、表面の紋様は肩部の裝飾として、稍々大形の組織を有してゐるに反して、裏面の方は口縁部の裝飾として限られ、小形の細い模様で紐繩の小さい結び目を象つた紋様が多い様である。

斯の様に裏面に紋様を附することは、外部からも其の紋様を見ることが出来る口の開いた鉢類に多いことは自然の勢であつて、屢々我が石器時代の土器に於いて見られるのであるが、特に此の裏面に於ける紋様の適用は指宿のものに於いて著しいと云つて宜しい。

繩席紋及類似的の紋様は此の遺跡の土器に太だ稀であるが、僅に三四片の存在を指摘するこゝとが出来ゐる。是は一つの器物に屬する破片であつて、二箇の並行曲線間に一種の席紋を押したものである。(圖版第三四1—3)

【註】(1)伊豆大島溶岩流下の遺跡に就いては、鳥居龍藏君「伊豆

大島溶岩流下の石器時代遺跡」(東京人類學會雜誌第一七

卷第百九十四號)參照。私も亦た明治三十九年此の遺跡を

訪ふて土器獸骨石鏃等を獲た。

(2)日向國東諸縣郡綾村大字北俣の遺跡は、梅原末治君と私

とが、大正七年十二月實査した。當時發掘採集の土器に

據る。

六、石器及貝殻等

【圖版第三〇】

石器は我々の發掘の結果獲たものには、Ⅱ地點の上層約四尺の處から、彌生式土器と共に一

箇の石斧を得たのと、B 地點で同じく上層彌生式土器と共に一箇の凹み石を發見したのに止まる。下層土器と一處に、或は其の層位からは終に石器に遭遇しなかつた。併し之によつて、上層土器の所有者も、石器を使用してゐたことが明瞭である。

(一) 石斧 B 地點發見のものは、分銅形の様にクビレのあつて、一方の大きな粗末な打製石斧である。其の刃部の端は半ば闕失して全形を窺ふことが出来ない。石質は緻密質の安山岩の様に見ゆる。(圖版第 301) 又た此の遺跡の一地點で採集した石斧の破片一箇も、同じ石質で分銅形である。(同上 2)

(二) 凹み石 卵圓形に近い安山岩を以て作り、其の表面に淺い凹みがある。此の類の凹み石は他の地點に於いて更に二例を採集した。(圖版第 300) 又た輕石製の圓石一箇を得た。(同上 6) 是も人工に成つたものと思はれる。

以上の外此の遺跡から磨製の石斧や、石鏃等の發見は未だ之を聞かない。

(三) 貝殻 B 地點の泥流磐の下に小さい貝殻を認めた外、已に述べた様に G 地點に於いて、同じく泥流磐の下に、稍々多くの貝殻の存在するのを見た。此等の貝殻は黒田徳米君の鑑定を煩はして、左の十五種を明にすることが出來た。

- | | |
|---|--------------|
| 1. <i>Trochus maculatus</i> Linné | ニシキウヅ |
| 2. <i>Monodonta labio</i> Linné | イシタ、ミ |
| 3. <i>Chlorostoma nigerium</i> (?) Gmelin | ヒメクボガヒ(?) 破片 |
| 4. <i>Nerita albicilla</i> Linné | アマヲブネ |

- | | |
|--|-----------|
| 5. <i>Batillaria multiformis</i> Lischke | ウミニナ |
| 6. <i>Strombus</i> (<i>Conomurex</i>) <i>luhuanus</i> Linne | マガキガヒ |
| 7. <i>Hemifusus terratanus</i> Gmelin | テングニシ |
| 8. <i>Latrunculus japonicus</i> Sowerby | バイ |
| 9. <i>Thais tumulosa problematica</i> Baker | イボニシ |
| 10. <i>Barbatia decussata</i> Sowerby | エガヒ |
| 11. <i>Ostrea</i> (<i>Lopha</i>) <i>gigas</i> Thunberg | カキ |
| 12. <i>Dosinia</i> (<i>Dosiniscia</i>) <i>japonica</i> (?) Reeve | カバミガヒ(破片) |
| 13. <i>Cyclina sinensis</i> Gmelin | オキシバミ |
| 14. <i>Meretrix meretrix</i> Linne | ハマグリ |
| 15. <i>Buditapes philippinarum</i> Adams & Reeve | アサリ |
- (四) 獸骨 は B 地點上層土器群中に介在したものが少しあつた。是は野猪の牙、鹿の骨などであつて、石器時代以降古代に最も好んで食用に供せられた獸である。B 地點泥流磐下の灰砂中にあつた木葉は粉碎して、其の何の樹に屬するかは詳にすることが出来なかつた。

七、結

論

以上私は指宿村遺物包含層に於ける調査の結果を述べ、其の發見遺物に就いて記載したが、此の遺跡は火山の噴出によつて、其の火山灰の中に埋もれ、泥流磐下に沒せられた先史時代のポムペイ或はサントリン」とも名づく可き面白い考古學上の遺跡であつて、先年發見せられた伊豆大島野増村の溶岩流下の遺跡と並び稱す可きものであらう。ただ其の場所は大島のように孤島の海岸絶壁の下にあるので無いから、感興を催さしむること少ないけれども、上下二層に亘つて、別種の土器の存在する事實に至つては、學術的に最も興味のあることであつて、大島遺跡に於いても全く見るここの出来ない現象である。

地表下十尺の深位にある貝塚式土器を残した石器時代の人民は、それでは何時頃棲息して居つたものであらうか。我々は之を火山灰の厚さによつて計測することは出来無い。噴出の多少、其時期の長短によつて非常の差違を生ずる火山灰の堆積は、何等年代の尺度とはならない。ただ他地方に於ける遺跡から考へて、此の十尺の厚い火山灰も決して長い年代によつて形成せられたもので無く、寧ろ短い時期に堆積せられたものと考へる外は無い。此の噴火に際して、指宿の石器時代人民は如何なる悲劇的結果を招いたか。遺骨などの發見が無いから之を證することが出来ないが、此の大噴火の瞬間、天地晦冥のうちに、彼等の平和なる生活は立ろに、カタストロフィに陥り、或は海岸に走り、獨木舟に乗つて、對岸大隅に遁れようと試みたものもあつたらうが、海嘯の爲に其の大部分は成効せず、空しく海底に葬られたことであらう。隠る可き岩

蔭山麓もない此の海邊に於いて彼等は恐らく其の部落を擧げて全滅に歸したと想像せられる。此の時の噴火は主として鰻池を噴火口とする火山の活動であつたろう。

併し此の悲劇の濟んだ後若干年月を経て、悲慘な記憶の消え去つた後ち此の薩南の樂天地は決して無人の地としては残らなかつた。或は半島の北方から、或は對岸の大隅から、新に石器時代人民は此處に移住し來つて再び此の海幸山幸の豐なる指宿地方に、而かも以前の悲劇が醸された其の遺跡の上に——何者丁度其處は海岸に近い適當な住地であつたから——平和なる部落の生活は再現せられた。此の新しい石器時代の人民の殘した遺物は即ち彌生式系統の土器である。

悲劇は再び繰返された。鰻池火山の爆發は泥流を流し、彼等の住居を埋めて、其の上に堅い磐層を形成し、先史時代のヘラクラネウムを作ろうとした。併し此の時の噴火は、以前のそれよりも恐らく短い時期であり、或は人民も其の生命の危險から遁げおほしたかも知れない。而して泥流磐の上に形成せられた火山灰の層は、更に此の時以後に於ける噴火によつて出來たものと想像せられる。三代實錄に見えた彼の貞觀十六年に於ける開聞嶽の噴火による降灰其者によつて、此の層の全部が出來たもので無いにしても、其の幾分かは、疑も無く此の歴史以後の火山作用によつて加へられたものと見なければならぬ。而して薩南半島は今なほ平和なる漁村によつて人民の棲息地となり、温泉浴場となつてゐることは、此の有史以前からの經過を繰返へしてゐるものに過ぎない。

併し我々は茲に重要な問題に逢着する。それは此の下層の貝塚式土器を作つた古い石器

時代の人民と、上層の彌生式土器を残した人民との關係である。人骨の發見の無い此の遺跡に於て、我々は考古學的資料によつて論ずる外は無い。其の土器の紋様製作の相違によつて、直に兩者を別人種に屬するものとすれば、それは最もナイーヴな説明である。我々は此の解釋を全然不可能であると云ふのでは無いが、他の諸遺跡の事實をも併せ考へて、此の兩人民は決して人種的に無關係のものであるとは見ることが出来ない。新來の石器時代人民即ち彌生式土器の製作者は、矢張り大體に於いて前代の石器時代人民の後裔であつて、それに多少の新しい要素を混和したにせよ、決して別人種と見る可きものでは無く、ただ文化の點に於いて新しいものを加へ、或る程度の進歩變化を生じたものに過ぎ無かつたと想像するのである。此の進歩變化を生じた文化を有した、人民は既に新に彌生式風の土器を作り、曲線的模様の代りに、直線的紋様を使用したと解釋するのである。此の兩人民の棲息時代の距離が假へ數百年あつたとし、其の間に人種的な入れ替りが行はれることを想像することが出来るならば、更に簡單に同人種間に於ける文化の變遷を推測することが出来る。又た更に短い年代の距離を考へるならば、愈々益々人種的な入れ替りの困難と反比例に、文化の變遷を以て解釋す可き必要の度を増すのである。私は人種の實質の時々刻々變遷しつゝあることを一方に認めると共に、他方に於いては前住人民の血液の長く後住人民間に遺存することを高唱し度い。私は現代日本民族の大本を作つた「原日本人」は日本國土に於いて其の新石器時代を經過したものであり、彌生式土器を伴出する石器時代の遺跡は其の後期のものであり、貝塚式土器を伴出するものは、其の前期のものであることを信ずる。前期の時代に於いてアイヌ的體質のなほ著しかつたことを認めると

同時に、後期の石器時代がそれと全くかけ離れた人種の残したものであることは出来ない。若し夫れ「隼人」「熊襲」などと云ふ名稱は此の指宿遺跡の遺物に於いて、上層土器の所有者に與ふ可きか、將た下層土器のそれに附す可きか、それは大膽なる歴史家に任せて置かう。